

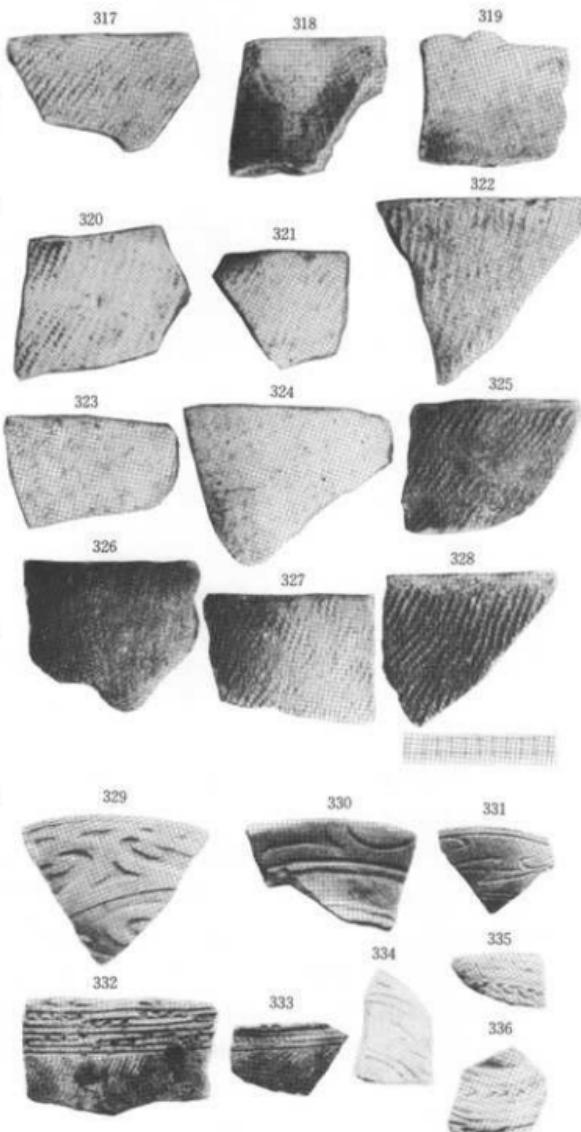
☆ここに掲げたもののうち、上段は、縄文のみ施文されたものである。

いずれも「大洞C₂式」粗製深鉢か、變形土器である。

- これらの土器に施文された縄文は、(L・R)→317
- 320~323・325・327・328・(R・L)→319・324・326である。

なお、326は単軸撚糸文(L・r)のものである。

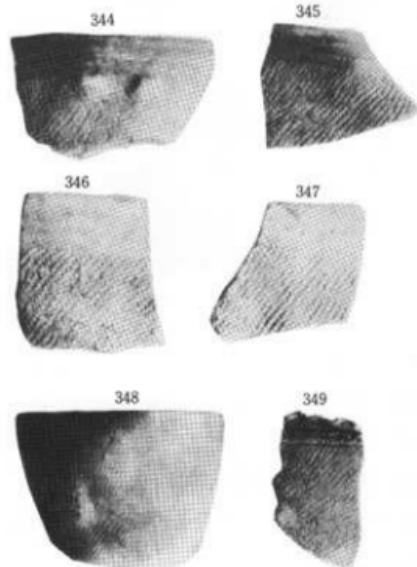
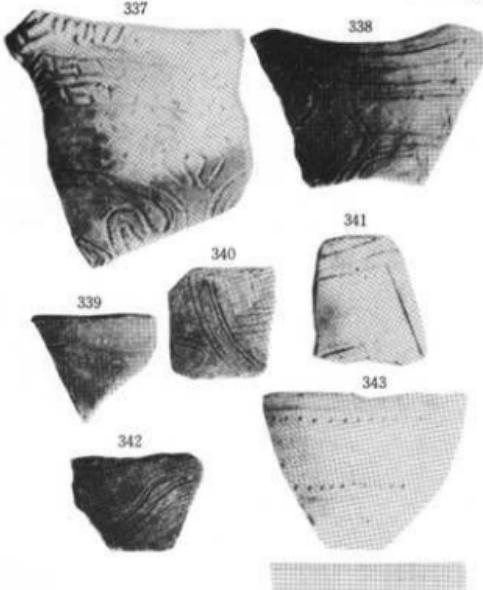
☆下段のもののうち、332・333は「大洞C₁式」粗製鉢形土器、他は、精製土器で、329~「大洞C₁式」330・331は「大洞C₂式」334~336は、「矢羽根状文」のある「大洞A式」精製土器である。



☆この上段に掲げたものは、「十腰内I式」の深鉢か変形土器である。

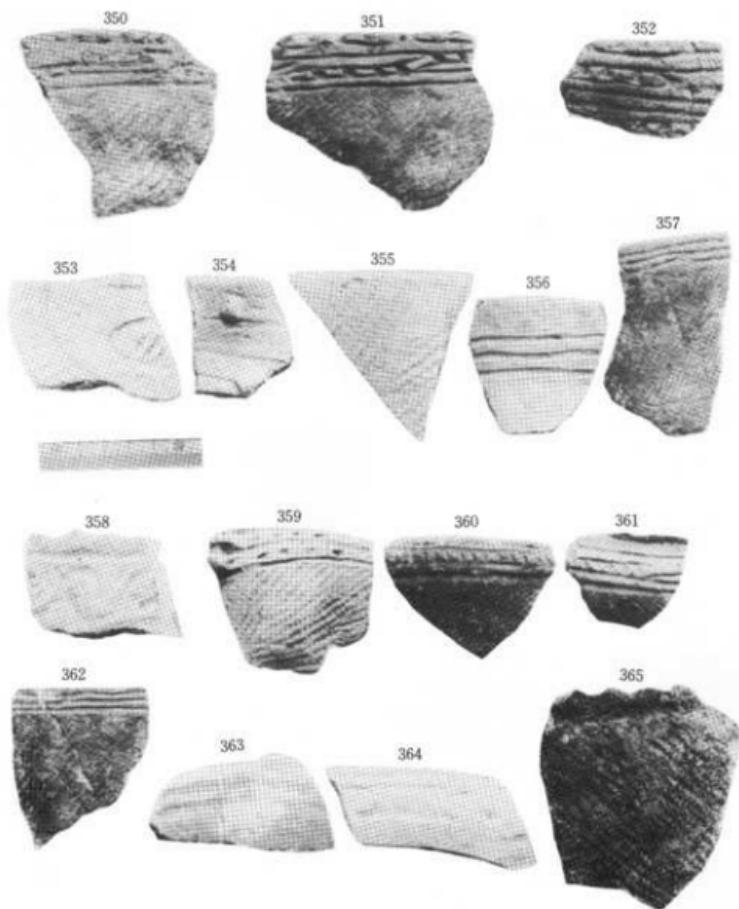
- 337・338・339は口頸部破片である。
- 340・343は口縁下または胸部破片である。

☆このうち、339・341・343は、「十腰内I式」の新しい方である。



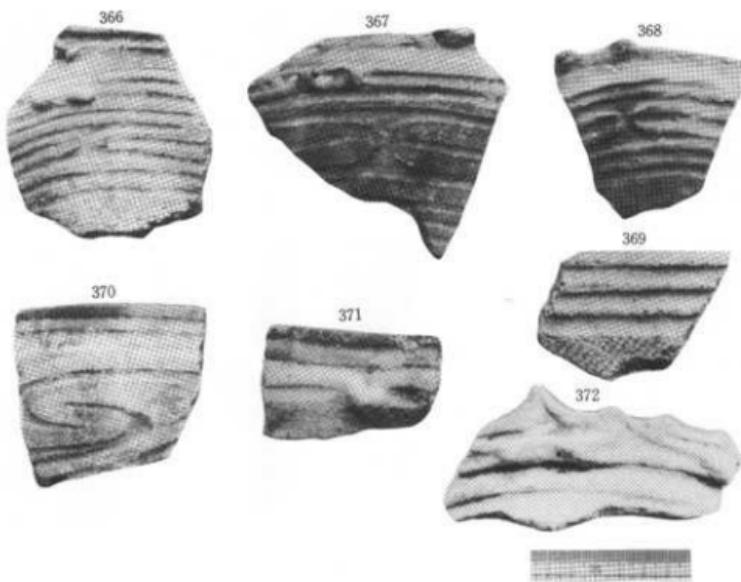
☆下段に掲げたもののうち、344～348は「大洞C₂式」土器で、このうち、344・345・348は鉢形、346・347は深鉢形土器である。

- 349は、「大洞C₁式」の粗製鉢形土器である。
- 施文される縄文は、(L・R) すべて左下りである。



☆ここに掲げたもののうち、350～357はA E₅-I出土、358～365はA F₅-I出土のものである。このうち、350～352・359～361は、「大洞C₁式」粗製鉢形土器、また、357・362は「大洞C₂式」、356は「十腰内I式」の粗製深鉢形土器である。なお358は「大洞B+C式」の粗製鉢形土器片で、この型式の出土は少ない。

☆363・364は「大洞C₂式」精製皿形土器、353・354は「十腰内I式」土器である。なお、355は大形の深鉢形土器で晩期のものと思われる。



☆ここに掲げたものは、A i - I 出土のものである。この i グリットは、未完掘である。366～368、371は「大洞A式」鉢形土器である。また、370・372・369は「大洞C₂式」土器である。このうち370・372は鉢形、369は深鉢形土器である。なお372は「大洞C₂式」でも後半のものであろう。

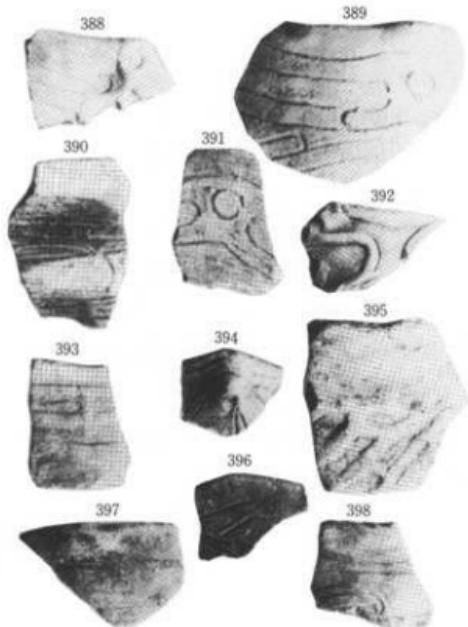
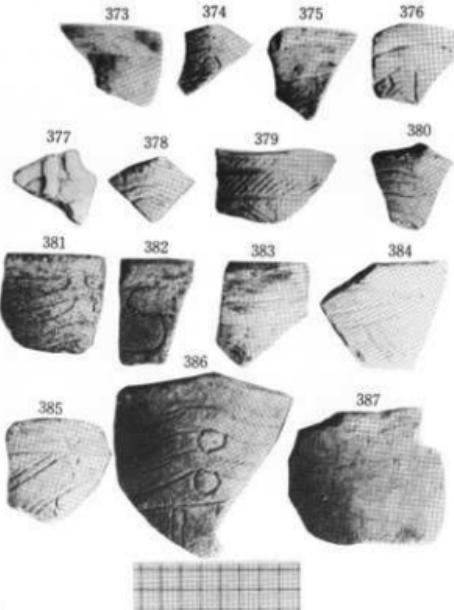
☆A地区総括 (P・L 1～P・L32)

A地区の各グリット、J₁・J₂・E₅・F₅・iより出土した土器群のサンプルを掲げた。出土土器は、「十腰内I式」の新・旧、晩期「大洞B・C式、C₁式、C₂式、A式」の各型式土器がI～III層に混在して出土したが、主体は縄文時代晩期「大洞C₂式」土器である。

☆出土する土器が混在することから二次堆積の可能性が強い、このA地区は斜面で館址であるため、歴史時代の削平もあったようである。

☆ここに掲げたものは、上段、下段とも後期「十腰内 I式」土器である。

- このうち、折り返えし口縁のもの→373・375・376、小突起をもつもの→374・378・380・386・平縁と思われるもの→381~384
- ・385・387、隆帯をもつもの→377、縄文を地文にするもの→379等である。



☆この下段のものも、すべて「十腰内 I式」土器である。

上段で述べたように、隆帯のあるもの→388・392・393・395、小突起下に円形の瘤のあるもの→394等もある。

☆また、この型式では、波状口縁のものも盛行する特徴がある。

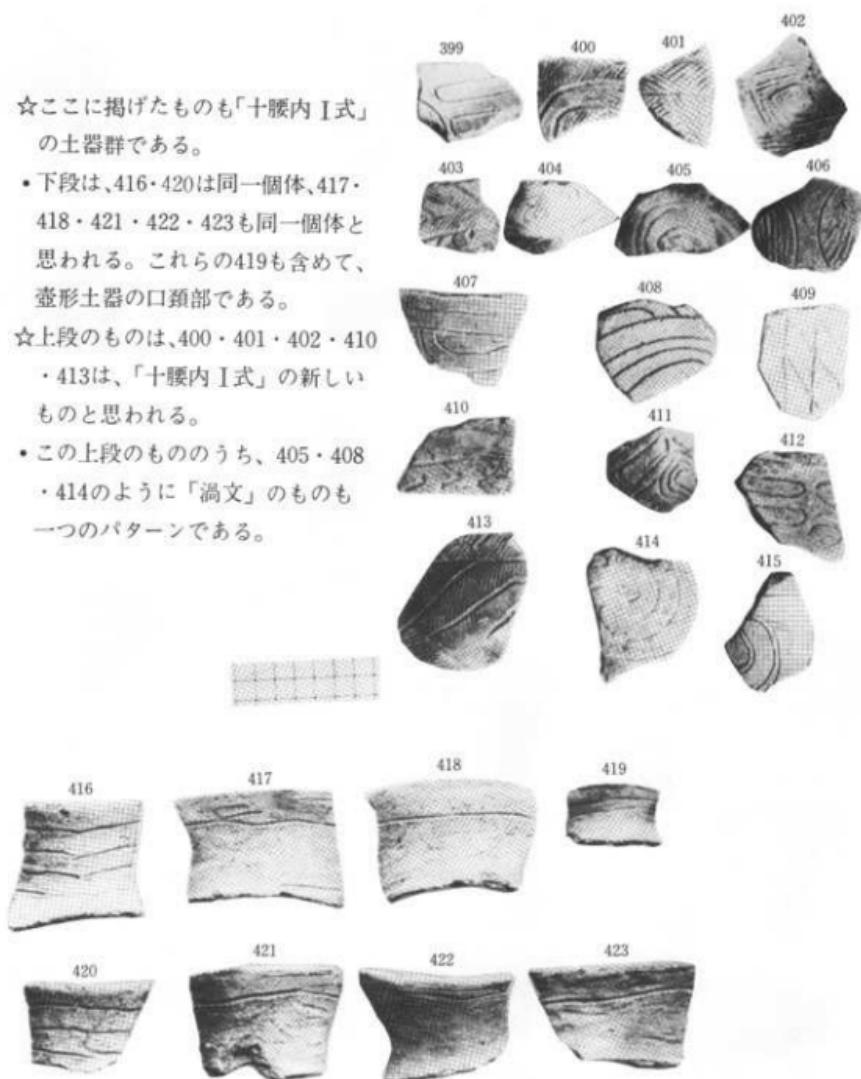
•ここに掲げたもののうち、393を除くすべてが、縄文がなく隆帯と無文帯・沈線文で文様構成がなされ、平行沈線、円形文、曲線、瘤、隆帯等の文様要素が認められる。

☆ここに掲げたものも「十腰内Ⅰ式」の土器群である。

- 下段は、416・420は同一個体、417・418・421・422・423も同一個体と思われる。これらの419も含めて、壺形土器の口頸部である。

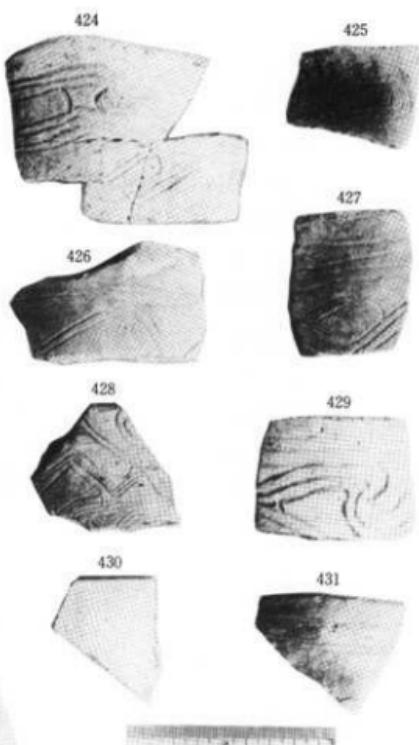
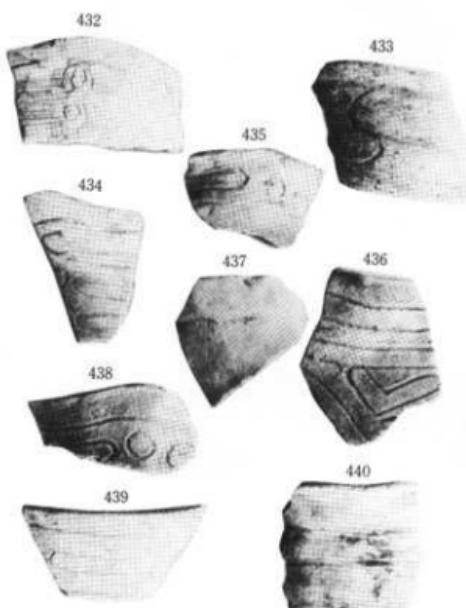
☆上段のものは、400・401・402・410

- ・413は、「十腰内Ⅰ式」の新しいものと思われる。
- ・この上段のもののうち、405・408
- ・414のように「渦文」のものも一つのパターンである。



☆この上・下段に掲げたものも「十腰内Ⅰ式」土器である。多分深鉢か彫形土器と思われる。

- ・口縁部は波状口縁のもの、平縁のもの等が見られる。
- ・また、施文を見ると、上・下段とも縄文のあるものではなく、平行沈線文、円形文、曲線文、区画文等が沈線で施文されるものである。



☆これらのもののうち、430・437は、口頸部が無文で、かつ研磨されたように平滑面をなすもので、「十腰内Ⅰ式」の後半のものと考えられる。

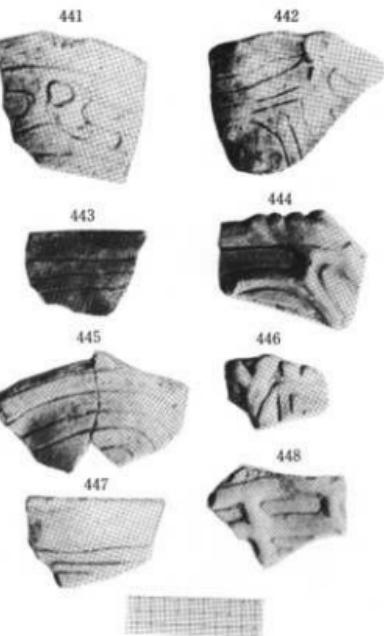
☆この「十腰内Ⅰ式」の土器群は、沈線文が2~3本がセットで施文されるのが一般的である。

※例→424~429・432等



☆ここに掲げたものも、「十腰内Ⅰ式」土器である。

- このうち、隆帶のあるもの→444~448、ボタン状隆起文のあるもの→442、小突起のあるもの→445等がある。
- ここに掲げたものも、深鉢か變形土器であろう。



☆下段に掲げたものも、「十腰内Ⅰ式」土器である。

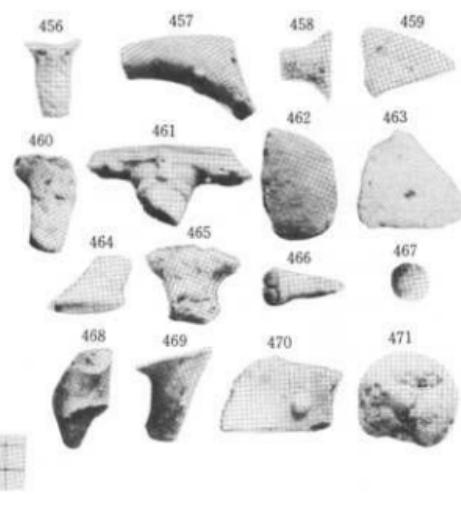
- 平縁のもの→449・450・452・波状口縁のもの→454である。

※AN₁トレンチは、「十腰内Ⅰ式」土器が主体である。

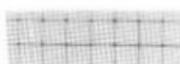
それに晩期の土器が混入して出土する。ただし、このトレンチは、Ⅱ層の黒土層で発掘を中止したトレンチである。

☆上段に掲げたものは、各地区より出土したものの一括して掲げたものである。

- ・土偶→456・460・464・468、注口土器片→457・461・465・469・458
- ・466→土器把手、470→板状土偶片?
- ・459・463→三角形土製品、467・471→球形焼土、462→不明



472



473



474



475



476



477



478



479

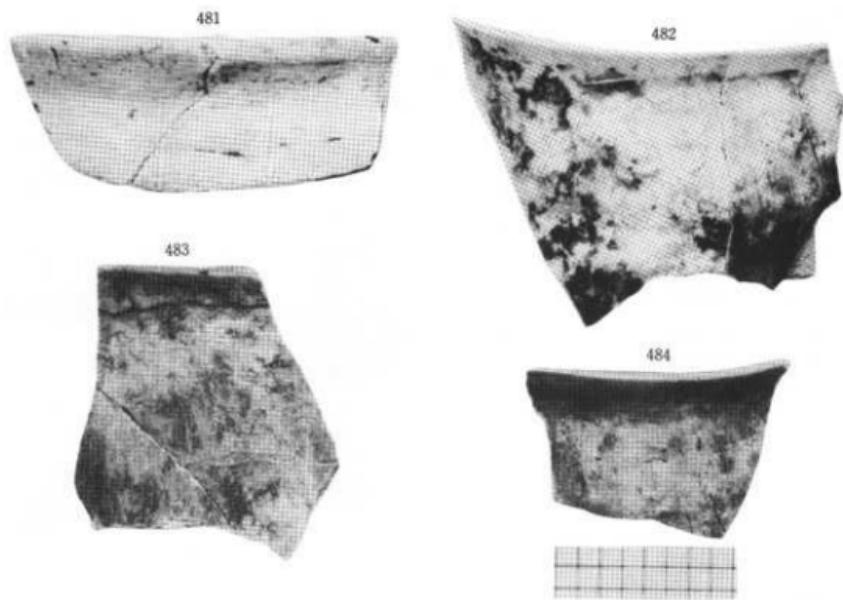


480



☆ここに掲げたものは、AN₁ - I出土の縄文時代晩期のものである。

- ・このうち、472～477は、「大洞C₁式」粗製鉢形土器である。
- ・また、478・480は「大洞C₂式」粗製鉢形土器、479は、「大洞C₁式」のものと思われる。
- ・施文されている縄文は、478・480は(L・R)、479は(R・L)で前者は左下り、後者は右下りである。すなわち、原体の回転方向は横方向である。



☆ここに掲げたものは、すべて土師器である。このうち、481・483は、AN₁-I出土、482・484はC地区X₁グリット井戸内出土である。

- ・器形は、口縁が平縁で、いずれも壺形土器である。このうち481は、器厚があり、口頸部は外反する。また、483もやや器厚があり、口頸部の外反は前者よりややゆるいものである。

- ・これに比して、井戸状遺構の底面出土の482・484は、器厚がうすく色調も黄土色で、軽いものである。口頸部の外反も、かなり強いものである。

☆これらの土師器は、口頸部の形態から「東北・北部の土師器型式」第二型式のものと思われるが、482・484は、そのうちの新しいものようである。

[C地区出土、土器]—(P・L39~P・L44)

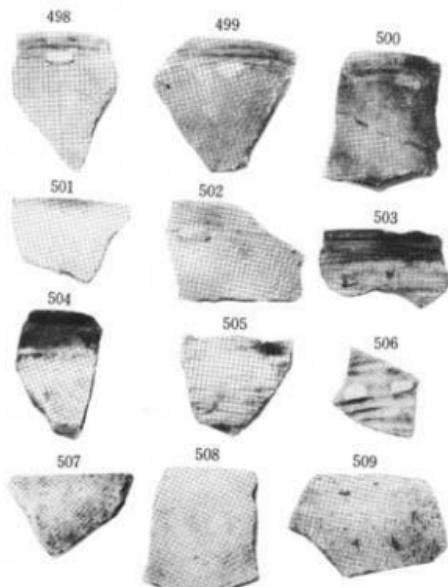
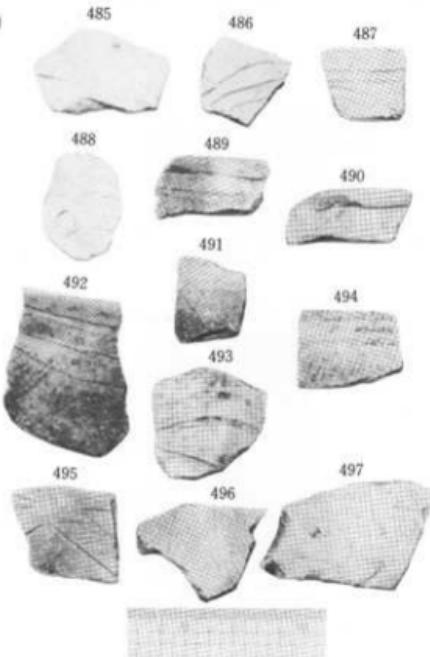
[CX₁ - I出土、土器]—(P・L39~40)

☆ここに掲げたもののうち、上段のものは、「十腰内I式」土器である。(ただし、494は大洞C₂式土器である。)

• この485~497のうち、沈線文のみのもの→485~489・493、491は網目状撚糸文、492・495、496は縄文と磨消帶のあるもの、497は縄文を地文に、垂下する波状文のあるものである。

☆さらに、495、497は、この型式の新しいものである。

P・L39



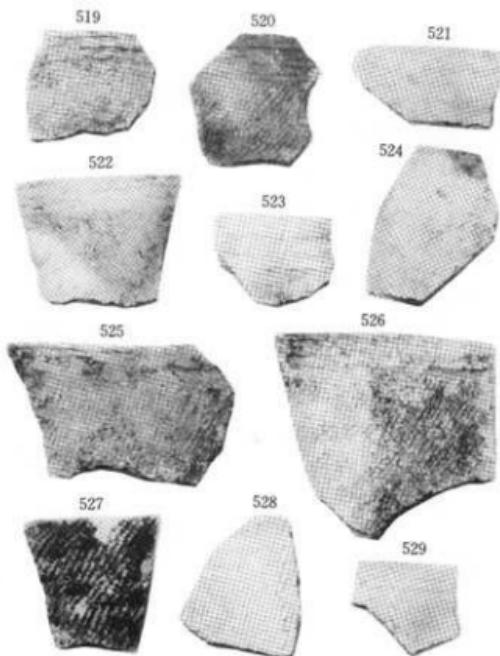
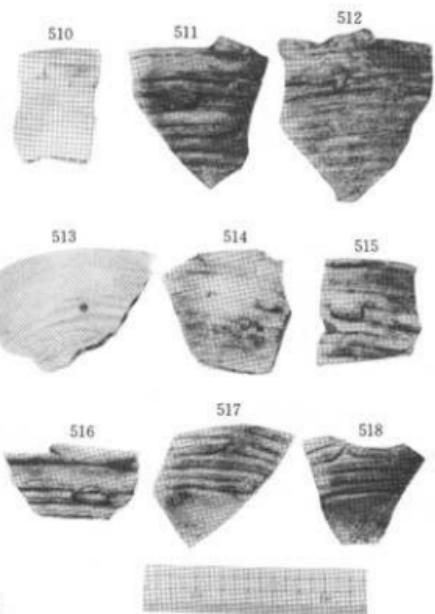
☆ここに掲げたものは、いずれも晩期の粗製土器である。

- このうち、498~500・502・504は、「大洞C₂式」粗製鉢形土器である。このうち、口頸部に無文帶をもつ、502は、「大洞C₂式」期の後半以降のものである。
- なお、504は肩部が張り口頸部がやや内傾するもので一時期前で、(C₁式)の可能性もある。507~509は深鉢形土器であろう。

☆ここに掲げたものは、いずれも「大洞A式」粗製鉢形土器である。

- このうち、510~512・514~518は、「入組み工字文」のあるもので、513は「矢羽根状文」が施文されるものである。

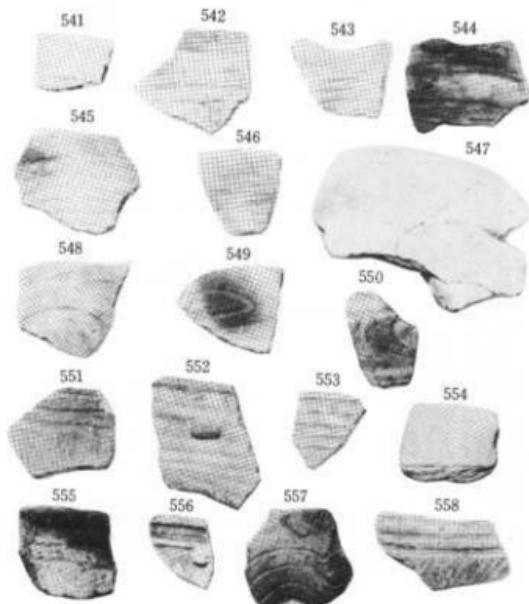
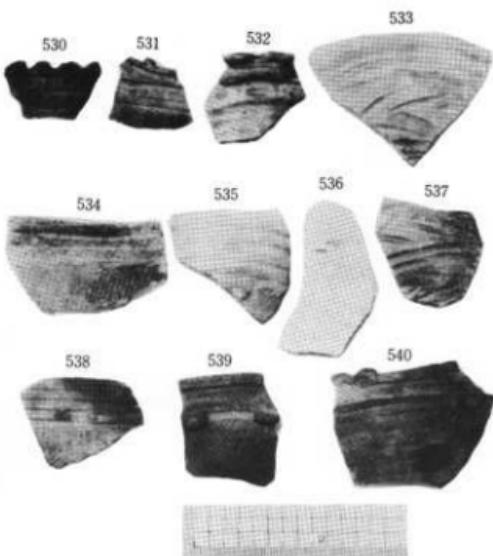
☆この「矢羽根状文」の施文される土器は、遺跡によって出土しない場合もあり注意が必要である。



☆ここに掲げたものは、大形の
變形か鉢形土器であろう。

- 既述したとおり、「大洞C₂式」のもので、口頸部には、二・三条の沈線文がめぐり、肩部下には縄文・撫糸文が施文される。
- 縄文(L・R)のもの→519・520・522・524~528、縄文(R・L)のもの→523、撫糸文のもの→521
- 527は、口縁下より縄文が施文されるもので一タイプである。

☆ここに掲げたものは、C地区
D₃-I出土のものである。
このうち、530・531は、「大洞
C₁式」鉢形土器、534・538
・539は「大洞C₂式」
・532・535・536・540は「大洞
A式」粗製鉢形土器である。
・533・537は、精製皿形土器で
「矢羽根状文」のものである。



☆ここに掲げたもののうち、
541~550は、C地区X₁-
II出土のものである。
・また、551~554は、C地区
D₄-I出土、555~558は、
C地区E₃-I出土である。
・このうち、「大洞A式」→542
・543・545~549・552・553
「大洞C₂式」→541・544
~551・555~556・558
・「十腰内I式」→557・554
・このように型式別に分けら
れる。

[C地区、E₃・E₄-I出土、土器]

P・L42

☆ここに掲げたものは、C地区
E₄-I出土の變形土器であ
る。

- このうち、559・562は口頸部
が外反する形態から「東北々
部の土師器形式」第二型式の
ものである。
- また、563~565も同型式であ
るが、口頸部の外反は、ゆる
い。
- 566は、C地区E₃-I出土の
土師器底面である。底面には
砂粒が多量に付着している。

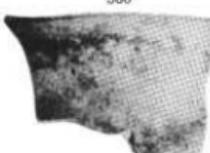
☆このC地区D₃~4、E₃~4
グリットには、住居址を検出
したが、これらの土師器を伴
うものである。



559



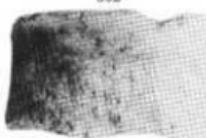
560



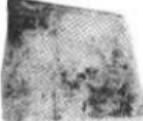
561



562



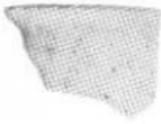
563



564



565



566

☆ここに掲げたものは、C 地区—C₂—I 出土の「十腰内 I 式」の土器片である。器形は、多分鉢形か甕形と思われる。

- ・いずれも、地文に縄文のないもので、沈線文だけが施されたものである。
- ・なお、572・574は、口頸部破片で深鉢かとも思われる。

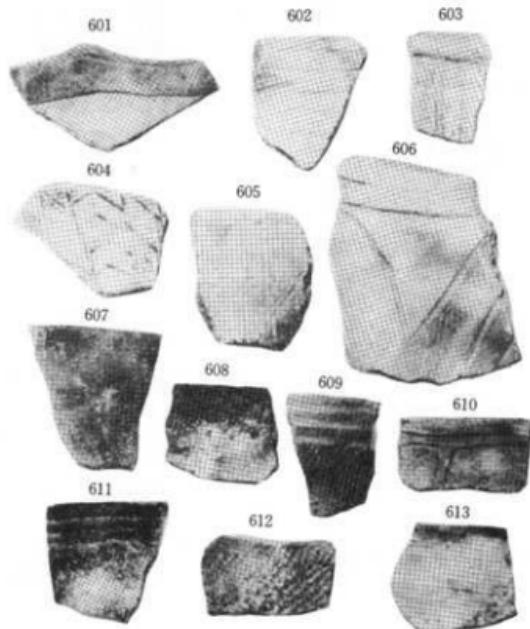
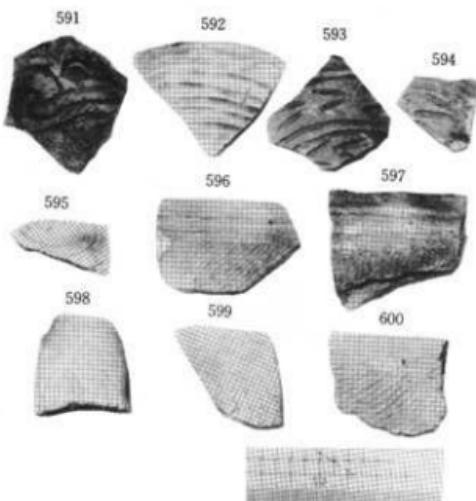


☆この土器群も、C 地区 C₂—I 出土のものである。

- ・このうち、576～586は、「十腰内 I 式」の深鉢か甕形と思われる。
- ・また、587～590は、晩期の土器である。このうち、587は「大洞 C₂」鉢形、588～590は、「大洞 A 式」鉢形土器と思われるものである。なお、589は、精製土器である。

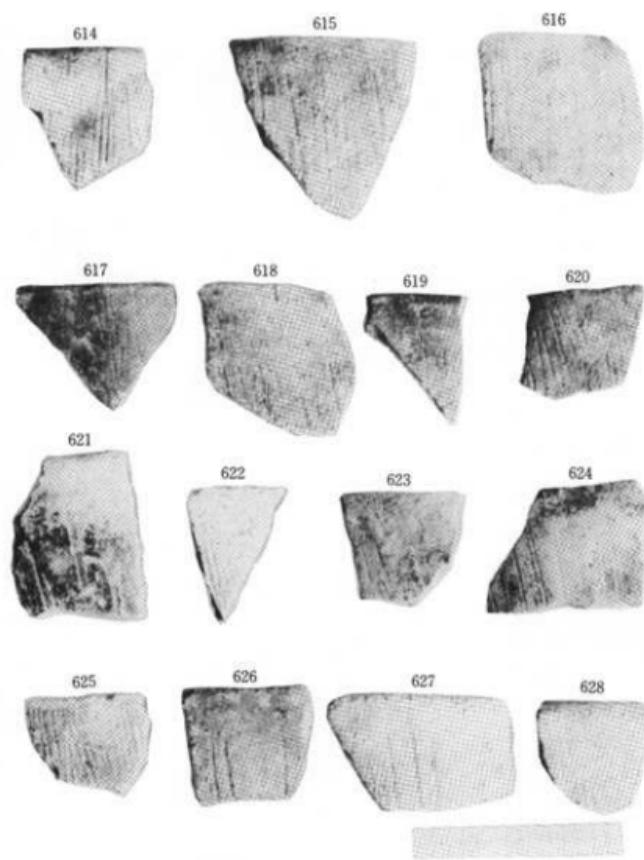
☆ここに掲げたものは、591～597が、C地区C₄—I、598～600がE₄—I出土のものである。

- このうち、591・595は「十腰内I式」、また、598・599も同型式である。
- 他の592～594・596・597・600は、晚期「A式」→592～594、同C₂式→596・597・600である。



☆ここに掲げたものは、C地区D₃—I出土で、601～606・610・613が「十腰内I式」、607～609、611～612は「大洞C₂式」土器である。

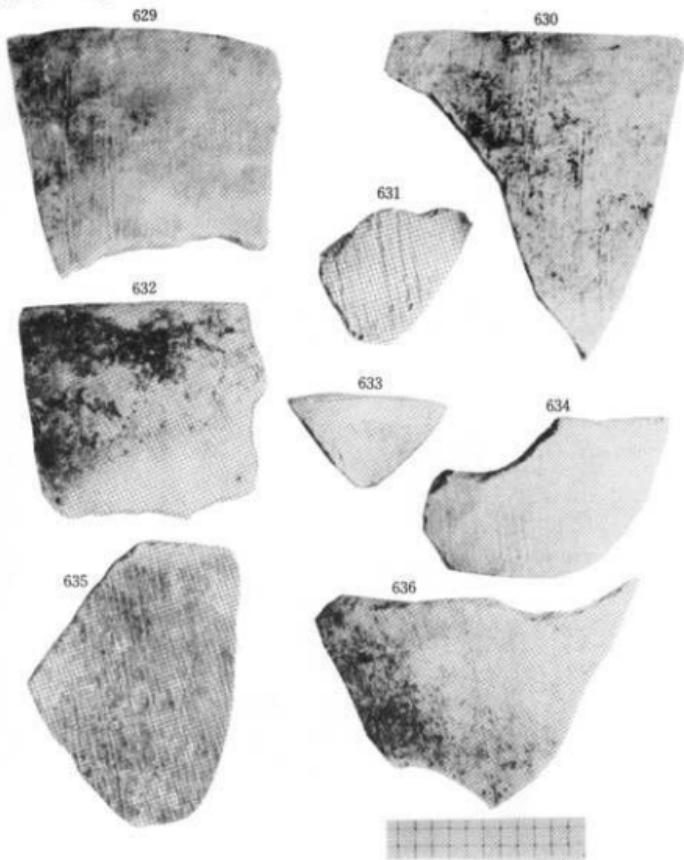
- このうち、604は「十腰I式」の新しいものである。
- また、607～609・611・612は變形か深鉢形土器と思われる。



☆P・L45に掲げたもの、および、P・L46に掲げたものは、当觀音林遺跡出土の条痕文の施文されるものを一括して掲げたものである。

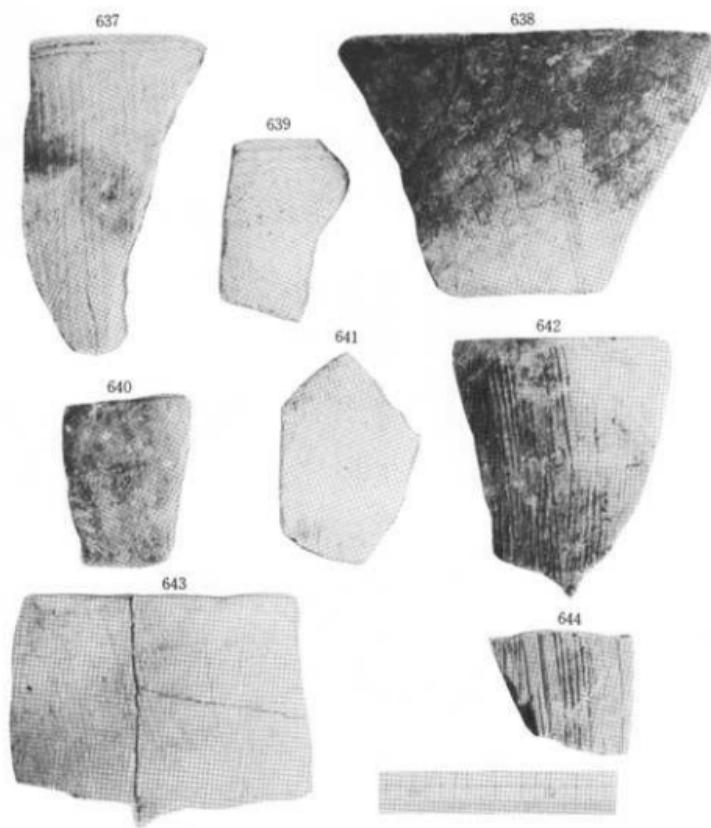
・いずれも粗製變形土器で大形のものである。これらの条痕文の施文される土器群の主流は、大形の變形土器で、若干の小型土器も出土するが、今回の調査では、小形のものは出土しなかった。

☆また、この条痕文土器は、縄文時代晩期の各型式土器に伴う。しかし、最も盛行するのは、「大洞C₂式」期のようである。



☆P・L45・46をとおして、口縁部は平線のものが多く、やや口端が内傾気味のものが多いようである。

- ・条痕文は、おそらく半裁竹管を施文具としたものようであるが、条痕文の間隔は、広いもの、せまいもの等もあり、これらは施文具の相違によるものと考えられる。
- ・ここに掲げたもののうち、626・628・629・632・633のように、口縁直下が磨消されたものもある。



☆ここに掲げたものも、P・L45・P・L46に示したものと同様、条痕文の施文されたものである。これらのものは、いずれも大形の變形土器と思われる。

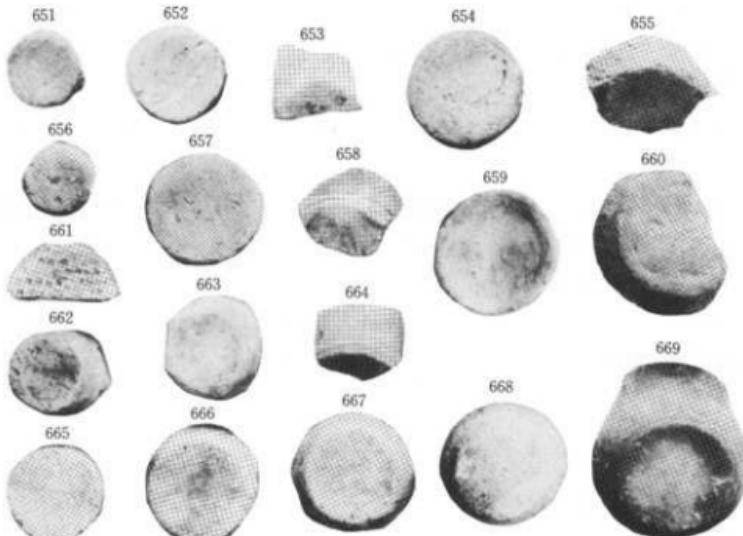
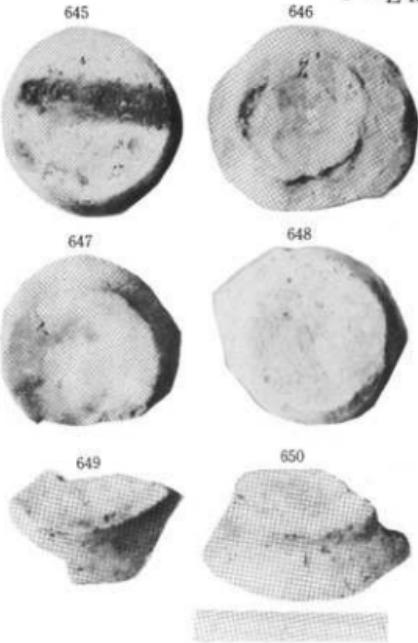
- すべて平線であるが、637・639は、口頸部がほぼ直立するものであり、643は、口頸部の上端が外反するもので、条痕文がやや右傾するものである。
- 637・639は、口縁直下に、二・三条の沈線文がめぐるもので、出土数は僅少である。
- 637は、一時期先行する可能性がある。639は「大洞C₂式」である。いずれも大形の變形土器である。

[各地区出土、土器底部]

☆ここに掲げたものも、上段・下段を含めて、各地区出土の土器底部である。(但し649・650は台付土器の台部である。)

- このうち、653・661は「十腰内Ⅰ式」土器の底部である。
- また、658・664・669は、「大洞C₂式」土器の底部であろう。
- 他は、型式名を特定することはむずかしいが、649・650は「大洞C₂式」と思われる。
- 以上のもの以外のものは型式を特定することがむずかしい。

P・L48



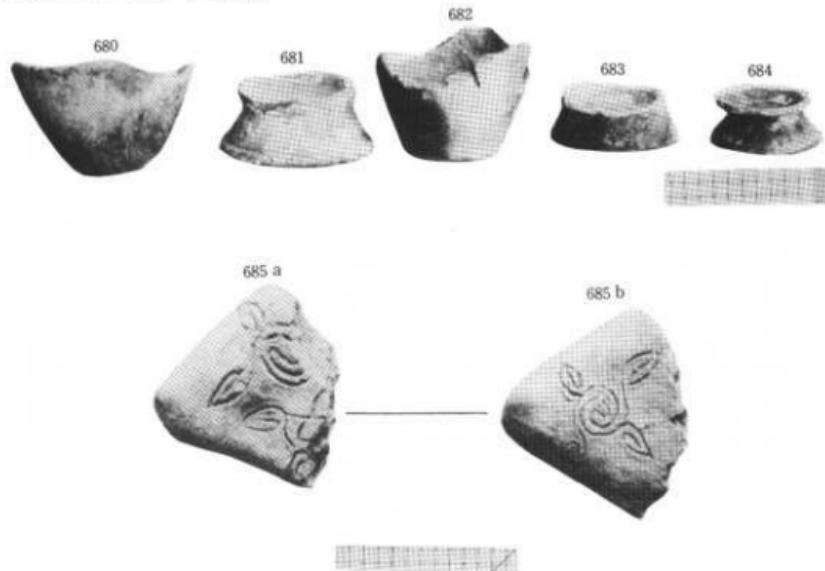


☆ここに掲げたものも、発掘区のうち、A地区のAJ₂-II→670・671、AJ₁-III→672・673・674、AJ₂-III→675、AJ₂-II→676~678、AJ₁-III→679出土のものである。

- このうち、小形鉢形→670~672、壺形→673で、いずれも「大洞C₂式」と思われる。

また、674は壺形土器のもので「十腰内I式」、下段の675~678は、いずれも「大洞C₂式」で、675は壺形、676も壺形のものと見られる。

- 677・678は、抽珍土器で台付土器の台部である。
- 679は、土偶脚部で、型式名は「大洞C₂~A式」-(仮称)のものであろう。多分遮光器土偶と考えられる。

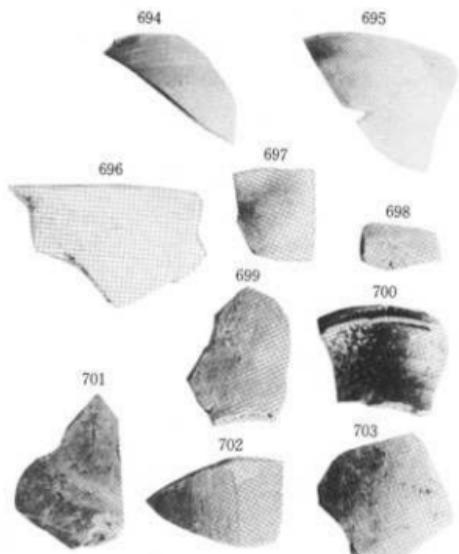
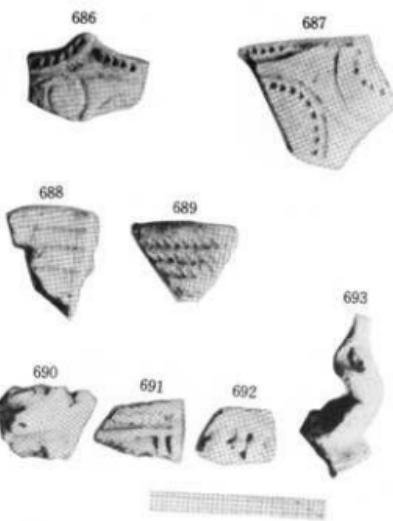


☆ここに掲げたものは、A地区AJ₂-I→684、AJ₂-II→681-683、AN₁-I→680・682は、小形鉢形、681・683・684は、台付土器の台部である。

- このうち、680・682は、小形鉢形、681・683・684は、台付土器の台部である。
- 下段の685a・bは、正面と裏面であるが、このものの破損面に貫通する溝が認められることから土偶肩部破片と考えられる。このものには、渦文による文様が施文され、全面が研磨されたものである。
- このものも「十腰内I式」土器に伴うものである。なお、このような形態の土偶、および施文は当遺跡では、始めて出土した。

☆ここに掲げたものは、D₆（壠状遺構）盛土内出土→686、A J₁—3出土→689、A J₂—I出土→688、AJ₂—II出土→687である。また、690～693は、AN₁—I出土である。

- このうち、686・687は、「十腰内Ⅱ式」土器、688は網代文のある土器底部、689は、中期のものであろう。
- 690～692は、「十腰内Ⅰ式」のものである。また、693は、珍しい把手状のもので、これも同時期のものであろう。



☆ここに掲げたものは、AF₅—I出土→694、AN₁—I出土→695、およびC地区X₁—I出土→696～700

- C地区C₂—I出土701～703である。
- このうち、694・700は須恵器で、前者は環形、後者は長頸壺の口部である。
- 他の695・697・698は、土師器环形、696・699・701・702・703は、土師器變形土器である。

☆ここに掲げたものは、A J₁—

I、出土→707、A J₂—I出土

→708、A J₂—II出土→704~

706、A J₂—III→709、C地区E₄

—I出土→710・711、A F₅—

I出土→712、D₇—N、(壠状遺

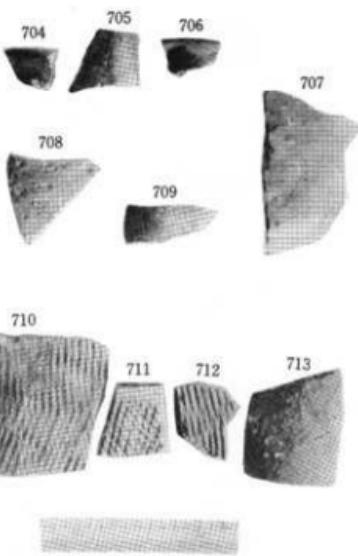
構)出土→713である。

•これらは、すべて須恵器片で、

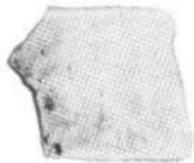
707は長頸壺、706は壺形、705・

707~709・713は長頸壺破片、710

~712は斐形須恵器片である。



714



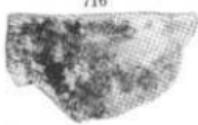
715



717



716



718



719



720



721



722



723



724



725



☆ここに掲げたものは、A地区J₁

—I→720、J₁—III→716・721・

J₂—I→718・719、J₂—II→

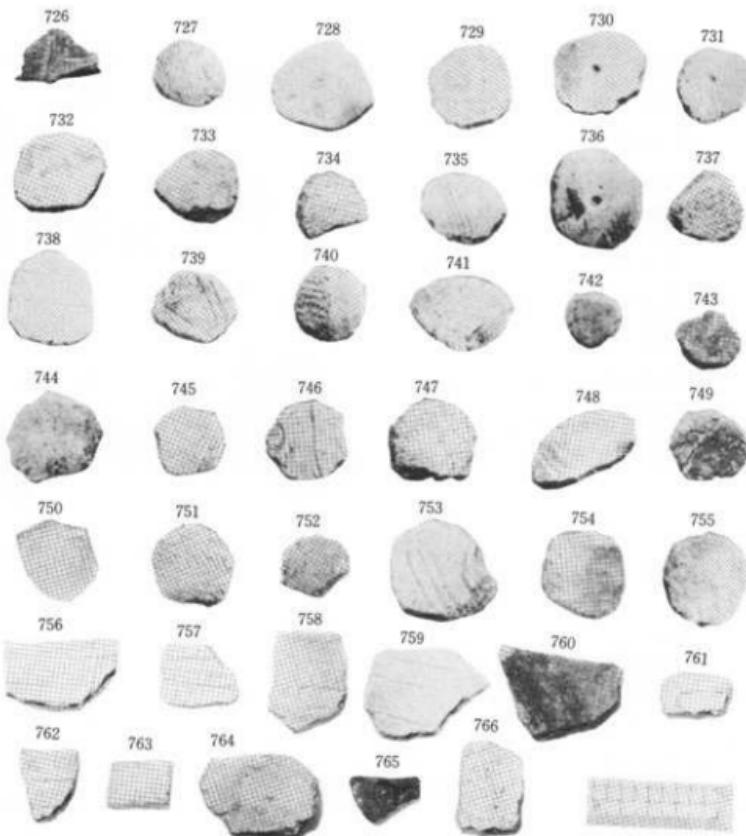
722・723、C地区、CX₁—I→

724・725出土である。

•また、TP₂→714・715、TP₃→717出土である。

•これらのものは、上段土師器斐形土器、下段は壺形土師器である。底面に糸切り痕が見られる。

→719・722~725



☆P・L53の上段に掲げたものは、円盤状土製品各種である。いずれも土器片を活用したものである。

・このうち、727・735・739・746・753は、沈線文のあるもので、「十腰内I式」土器片である。

また、730・731・736は、中央部に未貫通の穴があるものである。他は、縹文のあるもの、無文のもの等であるが、型式名は確定出来ない。

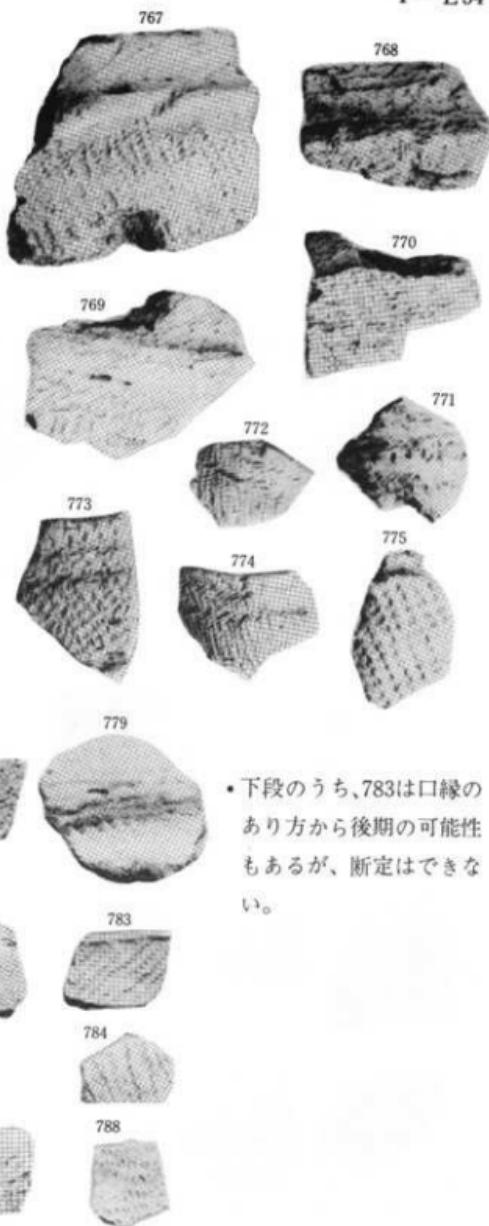
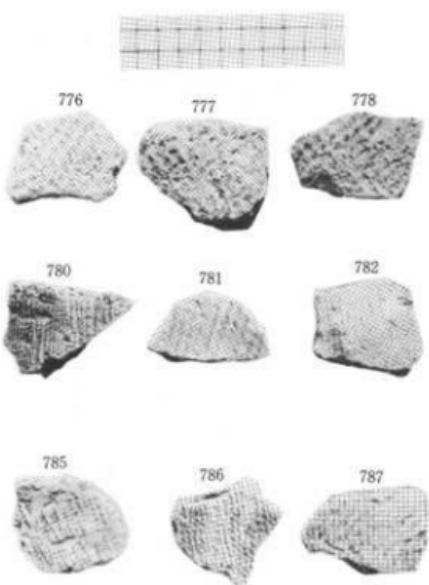
・中段・下段のものは、C地区C₂グリットの柱穴内から出土したもので、柱穴No.5・6より出土した「十腰内I式」土器片である。

☆また、下段は、やはりC地区C₂グリット出土のもので柱穴No.1→760～762、柱穴No.2→763・764、柱穴No.3→765・766出土である。

☆ここに掲げたものは、各発掘区より出土した縄文時代前期、および中期の土器である。いずれも「円筒土器で、767～775は、縄文時代前期「円筒下層式土器」である。

☆また、下段は縄文時代中期「円筒上層式土器」である。(但し、779を除く)

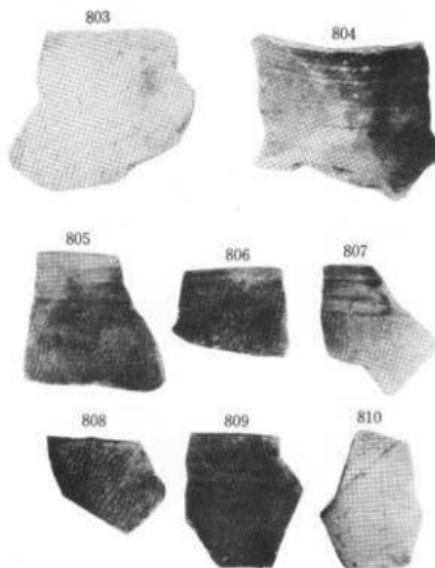
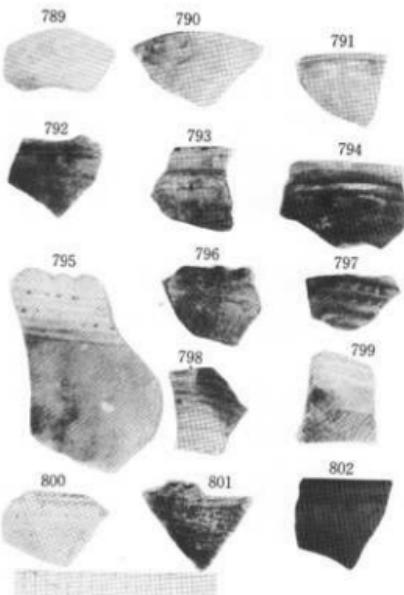
- すなわち、上段は前期a式下段の779は前期b式土器である。



• 下段のうち、783は口縁のあり方から後期の可能性もあるが、断定はできない。

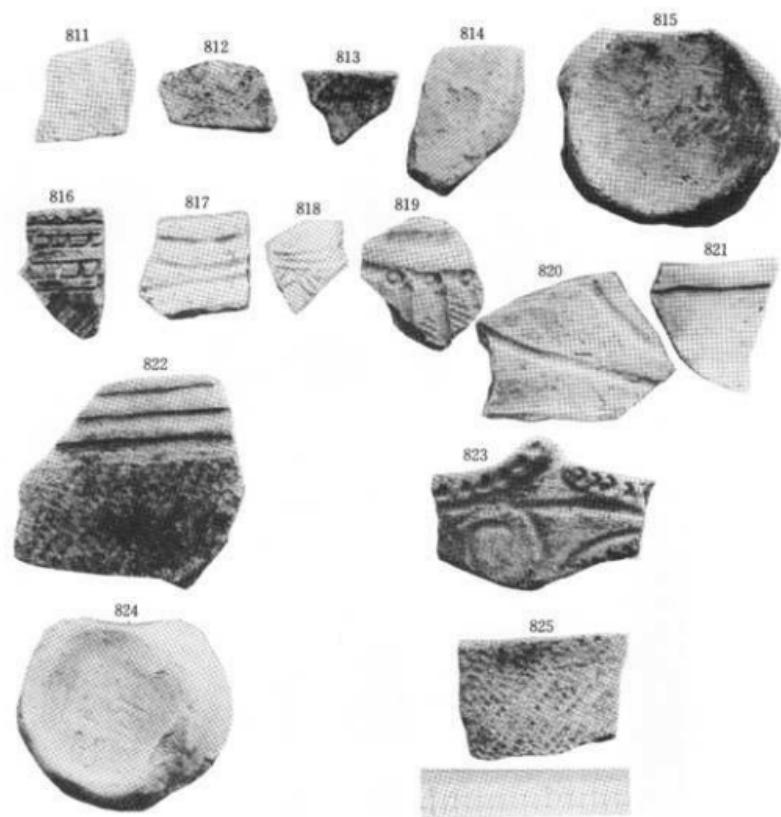
☆ここに掲げたものは、C地区X-1グリットで検出した「井戸」内の黒色土より出土したものである。
(この黒色土は盛土)

- このうち、790は「大洞C₁式」789・791は「大洞C₂式」でいずれも精製皿形土器である。また、795・797・800は粗製鉢形で「大洞C₁式」、794・798は「大洞A式」粗製鉢形
- 792・793・796・799・801・802は「大洞C₂式」鉢形土器である。



☆下段に掲げたものも、前段と同様、「井戸内」の黒土層より出土したものである。

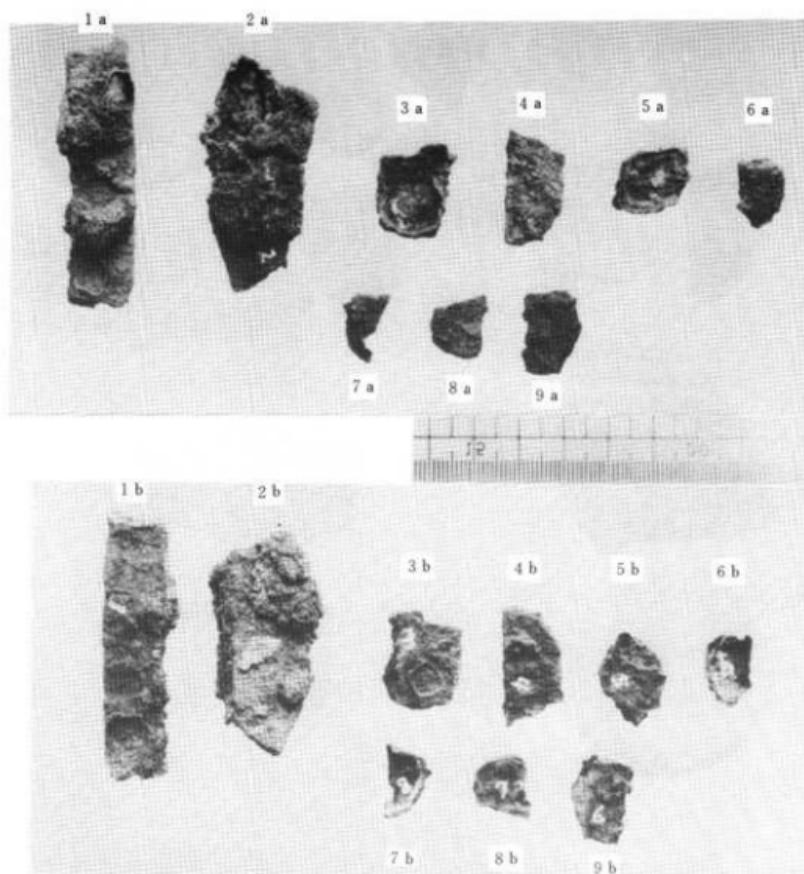
- このうち、804・810は「十腰内I式」で803・805~809は、「大洞C₂式」土器で、いずれも大型の盤形土器である。
- なお、804・810は「十腰内I式」のうちでも新しいものと思われる。



☆ここに掲げたもののうち、上段811～815は、T・P₂-Iより、816～821は、T・P₃I層より出土したものである。また、下段822～825は、D₆トレンチ盛土内の出土である。(T・P₁・D₇からは土器の出土はない。)

• 811～815は、T・P₂-I出土であるが、型式名は不明、T・P₃-I出土の817～821は、「十腰内Ⅰ式」、816は「大洞C₁式」である。

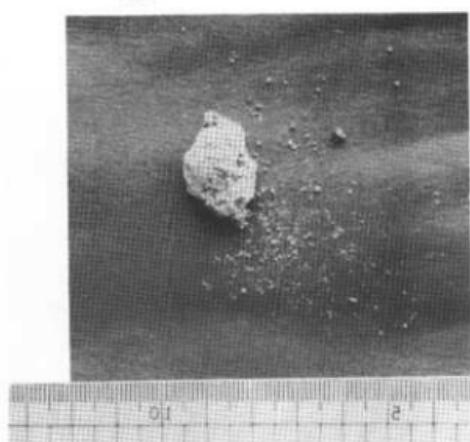
☆D₆-I出土の822は「大洞C₂式」、824の底部は晩期、825は中期かと思われる。823は、「十腰内Ⅱ式」土器である。



☆計測値（腐植したままの数値である。）

- $\left| \begin{array}{c} 1 \text{ a} \\ 1 \text{ b} \end{array} \right|$ = 長さ7.86cm、幅2.24cm、厚さ約0.61cm
- $\left| \begin{array}{c} 2 \text{ a} \\ 2 \text{ b} \end{array} \right|$ = 長さ6.79cm、幅2.87cm、厚さ約1.67cm

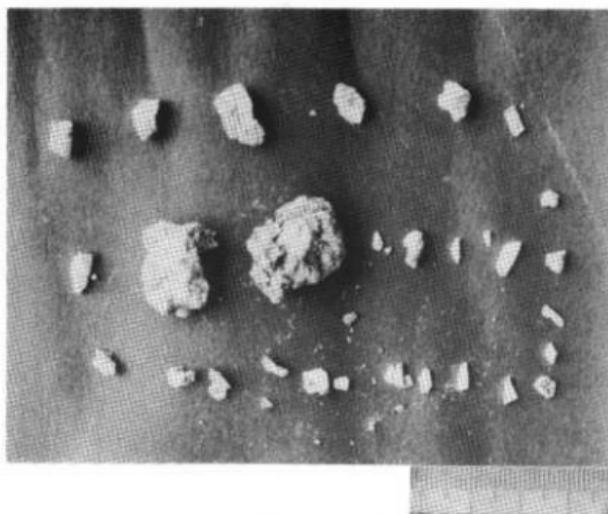
資料1



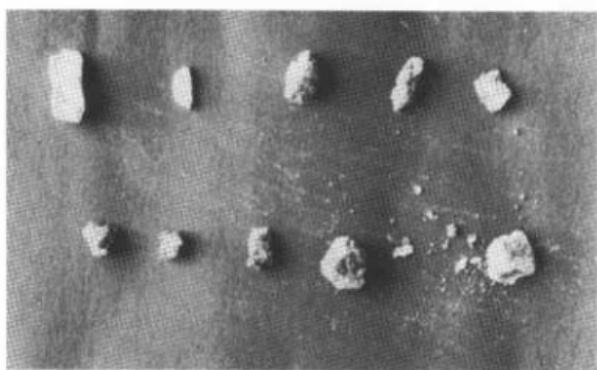
資料2



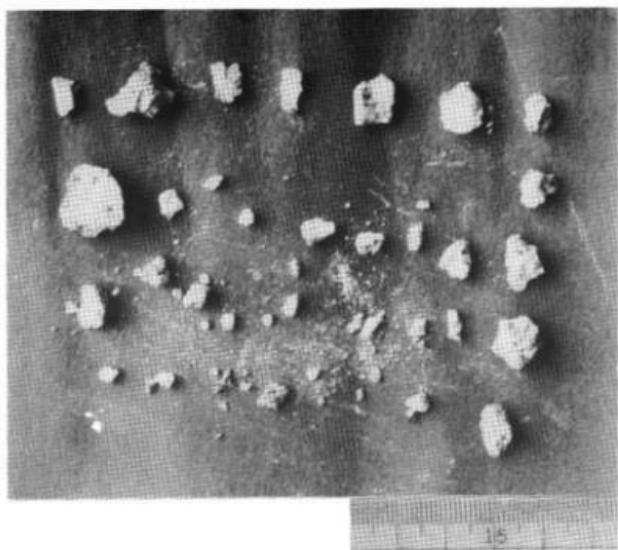
資料3



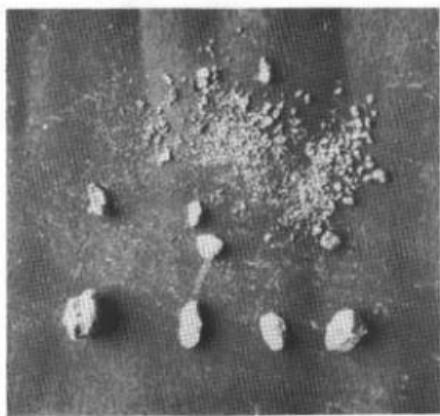
資料4



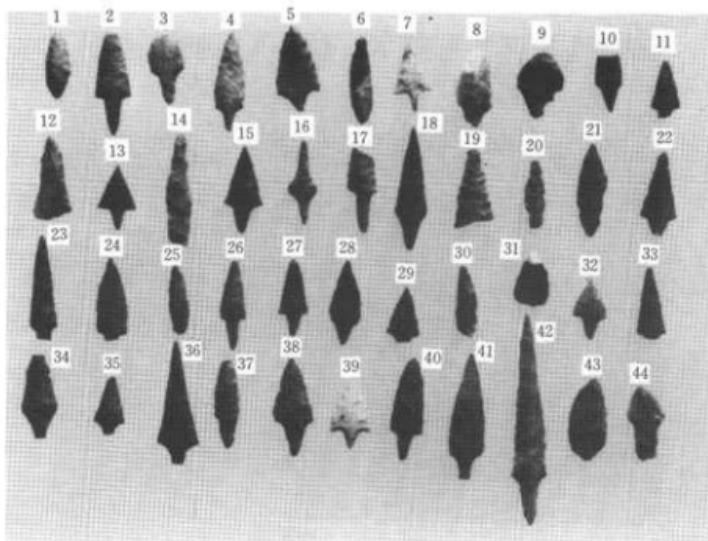
資料 5



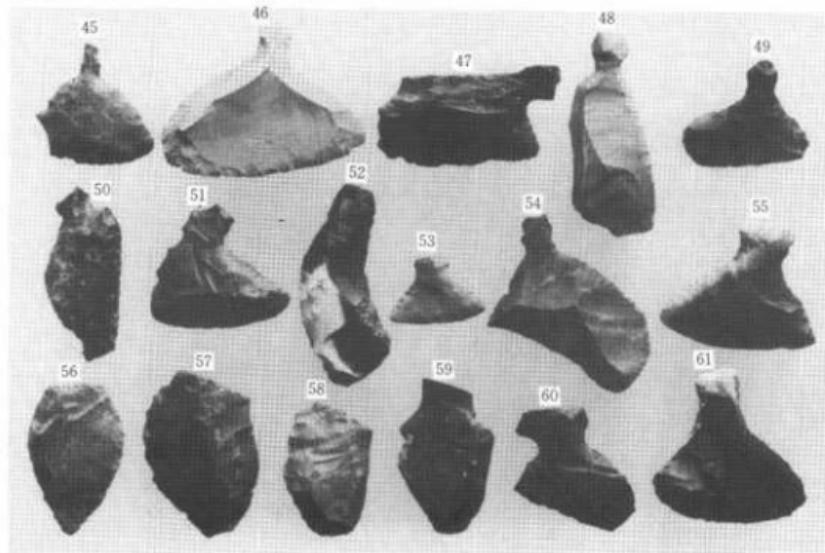
資料 6

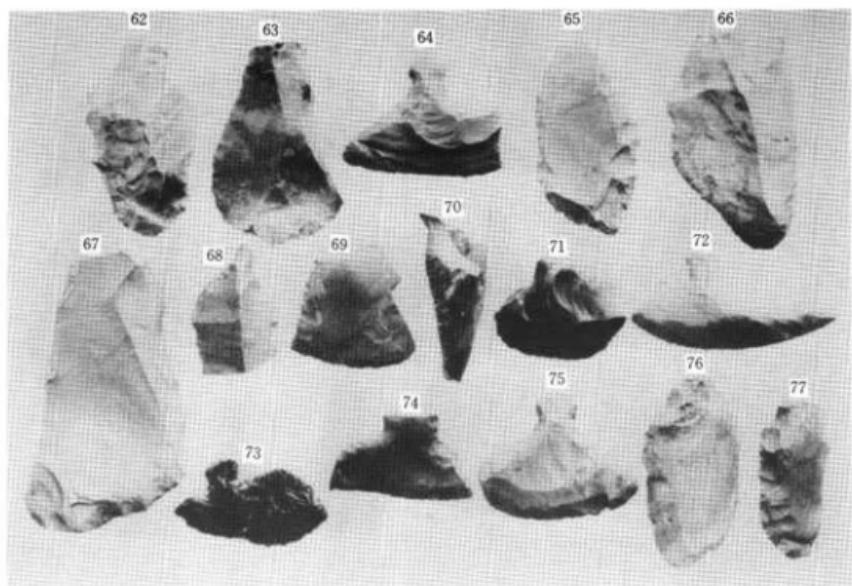


〔石鏃〕 1 ~44

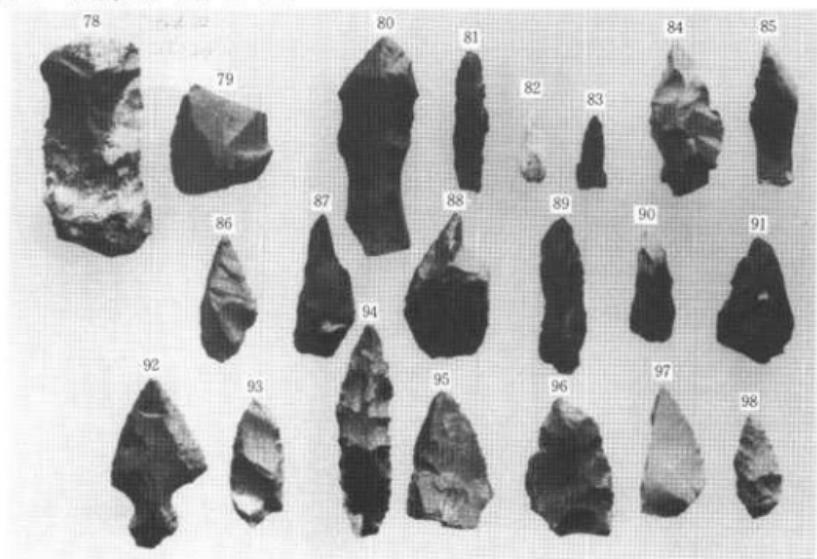


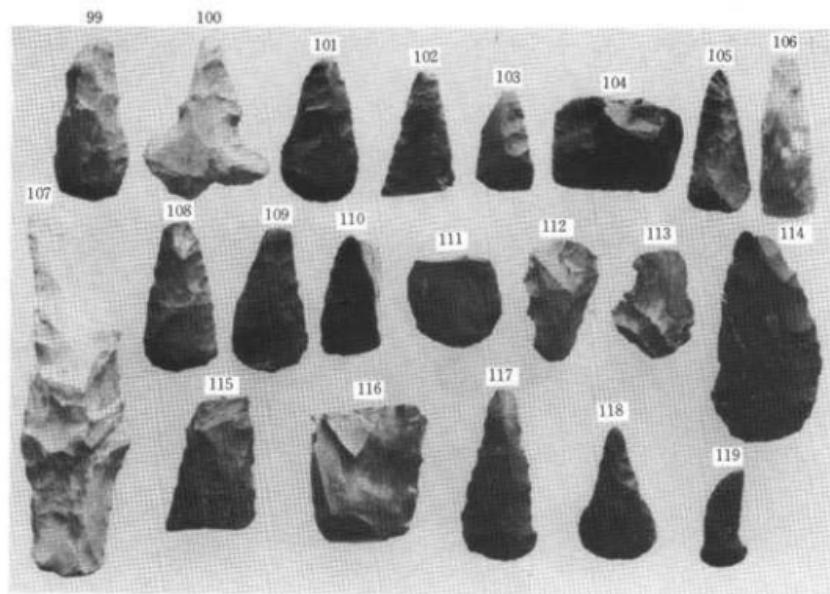
〔削器〕 45~61



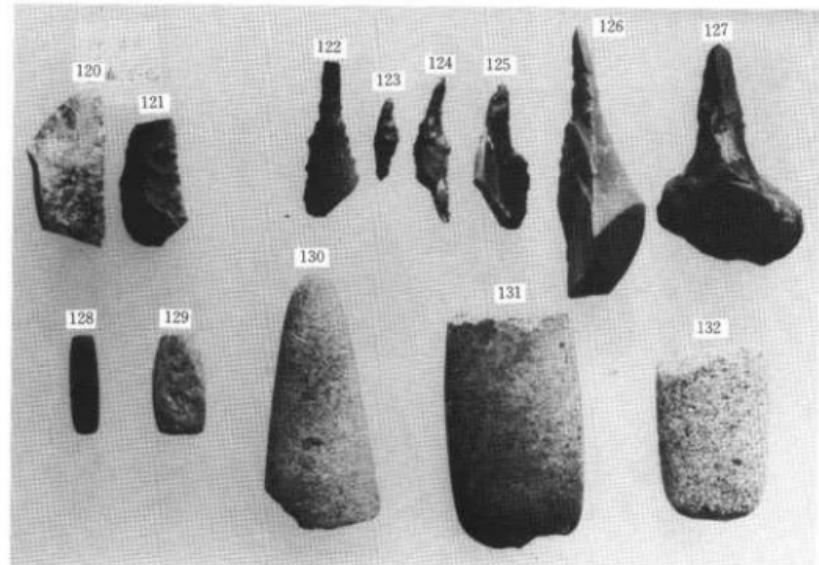


〔掻器・石槍〕 78·79、80~98





〔削器・石錐・石斧〕 120・121、122~127、128~132



133

打制石斧



134



135



136



〔岩偶·石冠〕 138·139

137



138



139



140



141



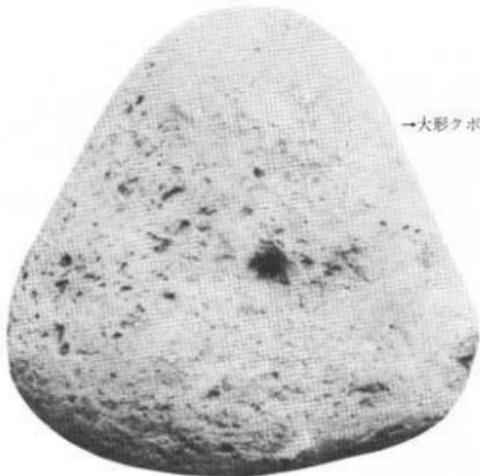
142



143



145



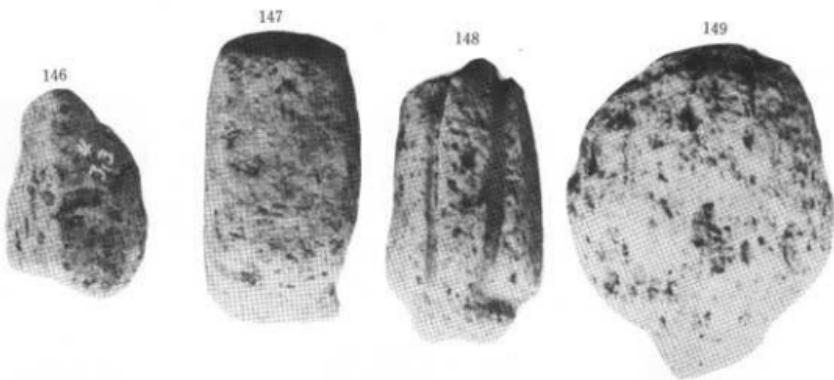
→大形クボミ石

144

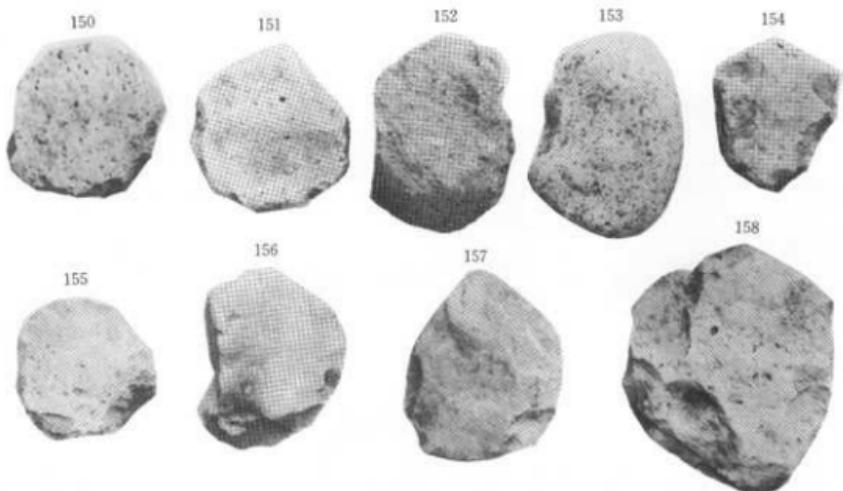


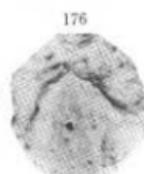
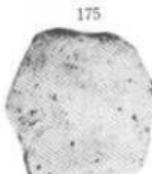
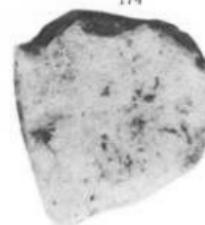
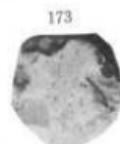
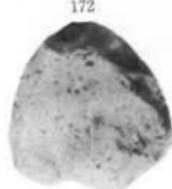
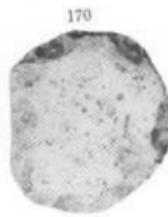
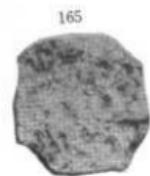
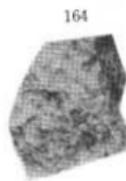
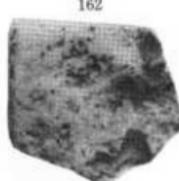
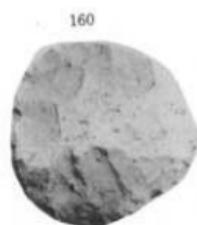
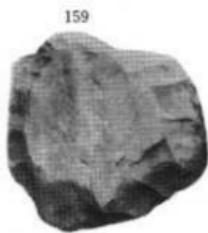
[輕石製石冠] 146~148、149→輕石

S · P · L 6



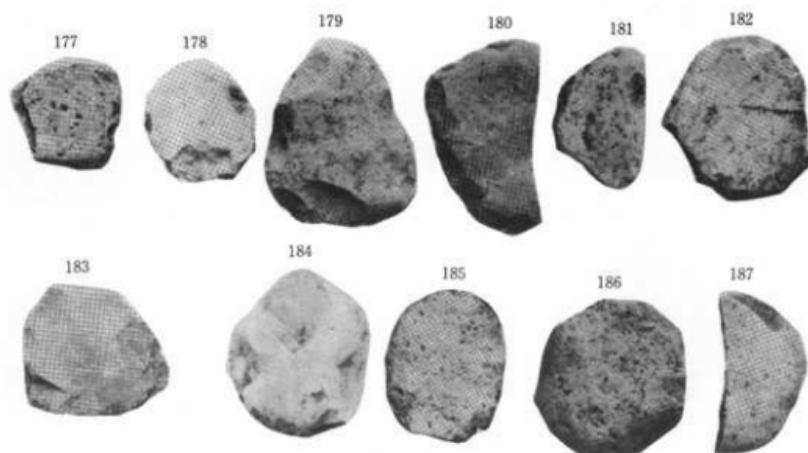
[円盤状扁平石器] 150~158



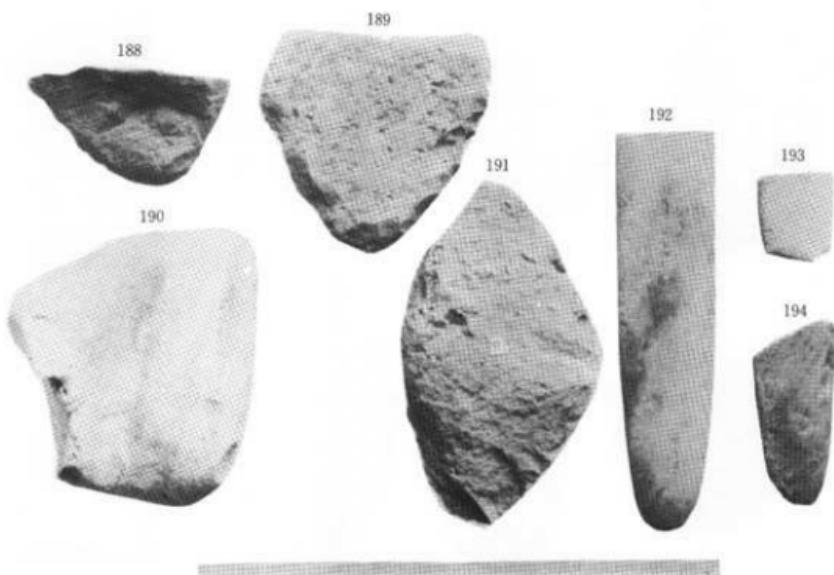


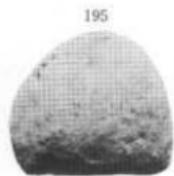
[円盤状扁平石器] 177~187

S · P · L 8



[鉈状石器・異形石器・石刀] 188・189、190・191、192~194





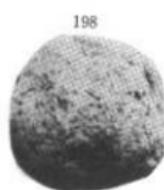
195



196



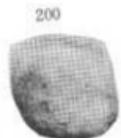
197



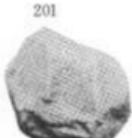
198



199



200



201



202

〔タタキ石〕 203~210



203



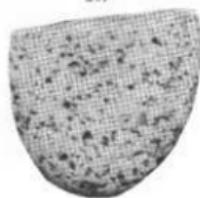
204



205



206



207



208



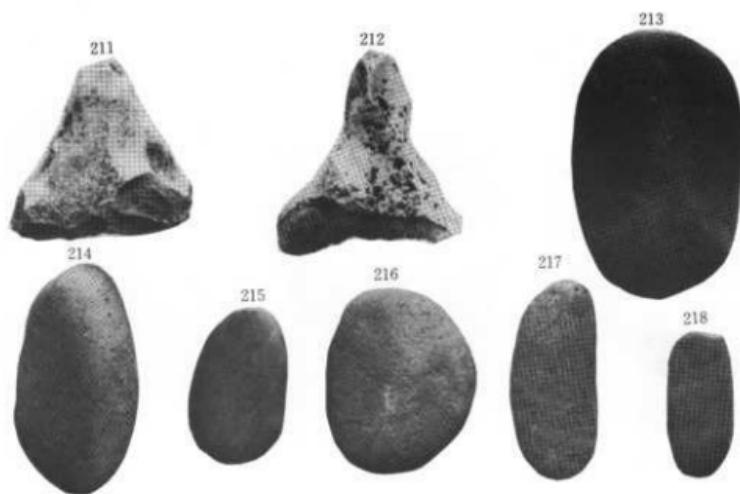
209



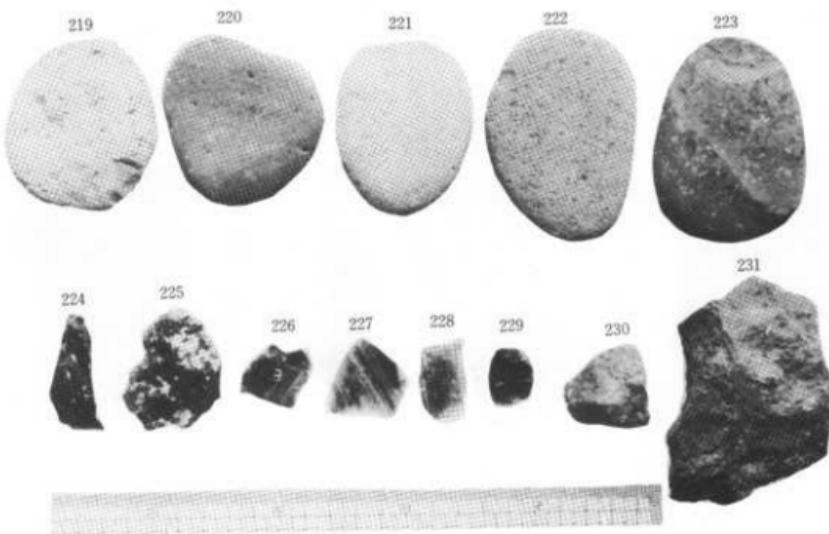
210

[三角形石器・磨痕のある扁平石器] 211・212、213~218

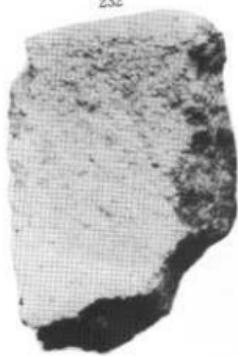
S・P・L10



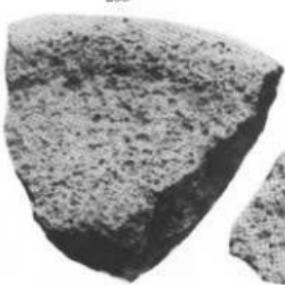
[磨痕と打欠きのある扁平石器・黒曜石・赤鉄鉱] 219~223、224~229、230・231



232



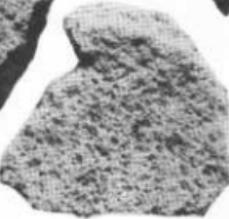
233



235



234



236



237

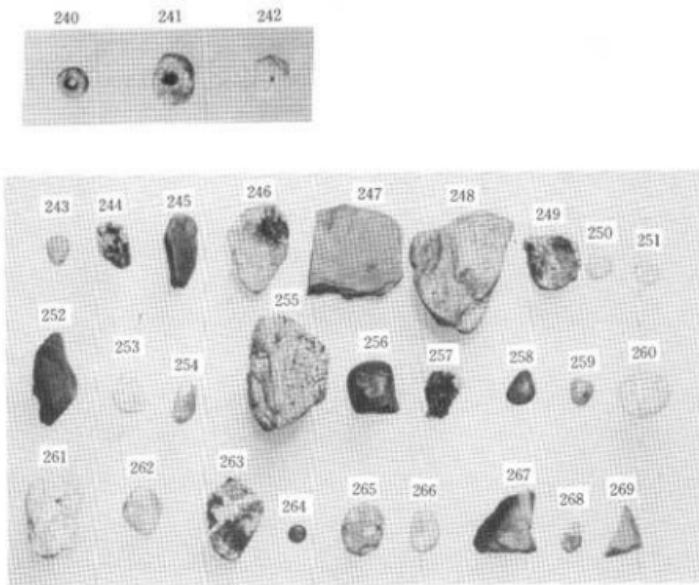


238



239





[台石] -270-

270



☆参 考 文 献

- 1) 1973 観音林遺跡 (第一次) 五所川原市教育委員会
- 2) 1984 観音林遺跡 (第二次) 五所川原市教育委員会
- 3) 1985 観音林遺跡 (第三次) 五所川原市教育委員会
- 4) 1983 五月女范遺跡 市浦村教育委員会
- 5) 1984 亀ヶ岡式土器 村越 潔 ニューサイエンス社
- 6) 1984 青森県考古学 青森県考古学会
- 7) 1983 「白坂」 山岸 英夫 北海道松前町教育委員会
- 8) 1975 北奥の古代文化 平山久夫編 学生社刊

五所川原市埋蔵文化財発掘調査報告書 第九集

観音林遺跡 (第四次)

○発行年月日 昭和61年3月20

○発行者 青森県五所川原市教育委員会

代表 教育長 鈴木太左衛門

住所 五所川原市岩木町12番地

○著者 新谷雄藏

川村真一

○印刷所 (株)西北印刷

